

<2019年度 第4回定例研究会>

地域＋学校＋福祉教育＝未来の地域人の育成！

～ 地域を変えるサービ斯拉ーニングの実践 ～

講 演：成合 進也（社会福祉法人日向市社会福祉協議会地域福祉課 課長）

日 時：2019年12月7日（土）14時～16時

2019年度第4回の研究会は、本研究所の地域貢献事業の一環でもある。小学生を対象としたサービ斯拉ーニングを実践している社会福祉法人日向市社会福祉協議会地域福祉課の成合進也氏を招き、実践の内容についてご報告いただいた。以下、その概要を報告する。

社会福祉法人日向市社会福祉協議会（以下、「日向社協」と略記）では、市内の小中学校・高校における福祉教育の推進に努めてきたが、当初は単発的なものにとどまり、学びが「つながらない」「ひろがらない」といった課題を抱えていた。そこで日向社協では、地域を基盤とした児童・生徒の“主体性”を軸とする連続かつ継続性のある福祉教育プログラムを開発した。

そのプログラムを実施するには、学校関係者や地域との連携が必要になる。日向市立大王谷学園の校区内で、地域を基盤として福祉を学ぶ「大王谷ふくし学園」を3年間にわたって継続し、その実践をもとに学校関係者へ学校教育活動との連携・連動を提案しつづけてきた。そうした3年間の地道な“仕込み”の末、2015年、大王谷学園初等部の6年担当教員から声がかかり、キャリア教育として“未来の地域人の育成”をテーマとした総合学習に、この福祉教育プログラムが導入されることになった。学校側のキャリア教育推進事業計画と日向社協の福祉教育実践を突き合わせて具体的なプログラム案を作成し、学校関係者・地域関係者と協議しながら進めていった。

この福祉教育プログラムは、次のように構想された。「多様な生き方にふれ、福祉についての関心と理解を深め、ふだんのくらしをしあわせにするために、児童一人ひとりができることを主体的に考え、行動する力（共に生きる力）を育むこと」および「地域で人がしあわせに暮らすために“必要なこと”（想い、方法・手段、行動）について学び、これからの地域を担う地域人としての役割を考え、日常生活で実践すること」を目的とし、目標として「人の気持ちに共感できる力や自分の考えを表現する力、考えを共有し実行につなげていく力を得る」ことや、「『動けば変わる！』ことを実感すること」、「自己肯定感や自己有用感を高める」ことなど5つを掲げる。そしてこれらの目的・目標を達成するための方針として、「学びの“ひろがり”と“つながり”のある福祉教育プログラム実践」「成果物の蓄積・保存、可視化（ポートフォリオ）を活用した実践」「効果的なリフレクションの実践（創造的リフレクション）」「主体的・能動的に学ぶアクティブラーニングの実践」「サービ斯拉ーニングの

実践」「地域にあるもの、社協にあるものはすべて使う。ないものは新たに創る」「児童の学びだけではなく、関わる人すべて（支援協力者、地域住民）が相互に学ぶ機会を提供する」など、9の方針を挙げている。とりわけ、このプログラムでは、単に児童が地域や福祉について知り、理解する（ラーニング）だけではなく、学んだ知識・技能を活かして地域に貢献する活動をし（サービス）、それを通して体験的に学ぶ、というかたちで学びを深めていくことを大切にしている。地域に貢献する活動のなかで、児童たちが地域に関心をもち、自ら気づき、考えることが期待されている。

福祉教育プログラムの内容は、12のプログラムから構成され、5つの学びのステージに分けられる。まずステージ1では、「福祉を知ろう！」として、福祉への関心と理解を促す学習をする。次のステージ「2. 地域を知ろう！」では、小グループに分かれ、「作戦会議」をおこなって地域の実態について予想（仮説）を立てたうえで、実際に地域を歩いて調査をおこなったのち、その結果をまとめた「地域診断書」を作成し、それを踏まえてグループが解決したい地域課題を決定する。続いて「3. 私たちにできること！」では、「子ども支援会議」と称して、グループごとに地域課題解決のために“できること”を考え、「アクションプランシート」を作成する。このアクションプランシートには、課題、目指すゴール、課題の原因、具体的な行動がまとめられる。

次に、いよいよ「4. 動けば変わる！」のステージで、地域での福祉活動に入る。まずは「作成会議」をおこなって、ゴールを目指していつ、どこで、どのような活動をするのか、必要なモノは何かを話し合い、「活動調整シート」を作成したのち、「地域を良くし隊」として地域貢献活動をおこなう。あるグループは、バスの停留所に屋根付きベンチを設置した。他のグループは、地域に住む障がい者との出会いから、自分たちの地域に暮らしている障がい者のことを意外と知らないことに気づき、まず自分たちが障がいについて学んだうえで、地域の人びとに呼びかけて福祉体験学習会を開催した。そしてそれが地域住民の“出会い”や“つながり”に結びついた。またあるグループは、高齢者を対象とした防災イベントを企画・実施し、家に閉じこもりがちの高齢者も何とか参加してもらうように取り組んだ。さらに地域の人からは子どもの参加者が少ないという課題が持ちかけられ、子どもたちの参加を呼びかける取り組みもおこなった。また、高齢者施設での交流行事を企画・実施した。いずれの活動も、もちろん児童たちだけでおこなったわけではなく、社協スタッフのサポートのもと、地域の役員や一般住民、民生委員、市職員などさまざまな人びとに支援・協力を求めながら進められていく。これらの活動をおこなったあとは、自分たちの福祉活動を分析・評価する。活動を通してどのような人たちと出会ったか、地域や自分自身にどのような変化があったかといったことを振り返り、自らの活動を自己評価する。そしてグループごとに活動報告書を作成する。

最後のステージ「5. 地域人としてのメッセージ！」では、まずクラス内でそれぞれのグループが活動報告書をもとにプレゼンテーションをおこなって、互いの活動結果や学んだことを伝え合い、学び合う。そのうえでさらに大規模に、地域の人びとを招いて地域福祉活動報告会をおこなう。その場では、クラスを越えて同じ地域の他のグループ活動について知ることができ、また地域の人びとからコメントや評価（賞賛）を得られる。

以上が、実践の内容である。このような福祉教育プログラムの実践は、児童たちはもちろん、学校関係者、地域関係者、そして社協関係者のそれぞれに、効果をもたらしている。児童たちに対しては、

地域および地域生活者への関心を高め、“地域人”としての自覚を芽生えさせるし、実際に地域をより良くする活動を経験したことで、「動けば変わる！」ことを実感し、自己有用感・自己肯定感を得るという効果があると考えられる。また地域社会にとっても、住民の参加意識の向上や、住民のつながり（ネットワーク）構築といった効果をもたらしているようである。

2015年から始まったこの実践も5年目を迎え、計555名もの児童がこのプログラムで学んできた。そのなかには、中学へ進んでも自主的に地域の課題に取り組んでいる子どももいるという。

この先駆的な事例に触発されて、質疑応答の時間には参加者から活発に発言がなされた。筆者も今回の講演を聞いて、児童たちが地域に関心をもち、地域の課題とその解決について自ら考え、自ら行動し、大人たちをも動かしていく姿に、感動を覚えた。他方、地域の大人たちも「子どものやることだから…」とお座なりに付き合うのではなく、きちんと支援・協力していることも印象的であった。そのことが子どもたちの「動けば変わる！」という実感につながり、さらには大人たち自身にも変化（つながりの構築、地域への参加）をもたらしているようである。こうした実践の継続が、地域の社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）を豊かにすることに寄与することが期待される。

もともと、このような“成功事例”は一朝一夕に生まれるものではない。成合氏が“仕込み”と表現する地道な活動のなかで、しっかりとしたプログラムの構築がなされ、教育関係者や地域関係者等の信頼が獲得されていったからこそ、可能になったのだろう。今後それぞれの地域での取り組みの参考になるばかりでなく、大学でのPBL（課題解決型学習）などにも大いに参考になりそうな講演であった。

（研究会報告担当者：杉本 学）